

2019 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	古代人名における国語学的研究
キーワード	①日本語学、②文字・表記、③上代日本語

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	スズキ タカシ 鈴木 喬	所属等	九州共立大学 共通教育センター 講師
プロフィール	1980 年生まれ。2013 年愛知県立大学 博士後期課程修了。博士（国際文化）。日本語学における文字・表記を専攻しています。とくに「上代」と区分される 7, 8 世紀の日本語に関心があり、『古事記』『日本書紀』『万葉集』だけでなく、正倉院に残る文書や、出土文字資料を中心に研究してきました。中国語の文字である漢字をいかに受容し、日本語の文字として適応させてきたのかを課題としています。対象とする資料が、日本語学だけでなく文学・歴史学・考古学などに関する知識を必要とするため、他分野の研究との連携を意識しています。		

1. 研究の概要

日本人の名前は、日本語で命名され漢字で表記される。人名の考察は、用いられる語や漢字運用を中心として日本語の解明につなげることができる。

本研究は、「上代」と研究上区分される 7・8 世紀の日本語について、古代人名資料を対象として考察するものである。また古代人名のデータベースの作成を目標に進めている。古代人名をより多く収集、整理することで、計量的言語研究にも展開でき、また多くの研究者や他分野の研究者が幅広く利用できるからである。

昭和 33 年（1958）から 52 年（1977）刊行の『日本古代人名辞典』（全 7 冊）に収録されている古代の人名は、2 万 2 千にもものぼり、日本各地で新しく報告される出土文字資料の多くには人名が記されている。考察対象として量的に十分である。『日本古代人名辞典』に収録される人名の多くは、正倉院に残る 8 世紀の行政文書に関わるものである。大宝 2 年（702）の御野国（現在の岐阜県）、筑前国（現在の福岡県）などの古代の人名を記載した戸籍台帳が残存している。同時代における地域の差や資料の差を考察することが可能である。また現代がそうであるように、人名の命名は家族間において命名規則のようなものがあることから、家族関係という文脈で人名にみられる語を観察することも可能である。

固有名詞を研究対象とすることは、名称学や命名論などがある。また語源解釈といった形を伴う場合もある。これは固有名詞が文脈に関わらないことが大きく、名詞・動詞といった語彙に比べ研究対象になることが少ない。古代の人名は一般語彙を用いて命名されることが多く、また漢字をどのように運用しているのか考察することができる。これまで研究対象として扱われることが少なかったがゆえに、波及効果は高いものと考ええる。

2. 研究の動機、目的

「上代」と研究上区分される 7・8 世紀の日本語の言語事象は、『古事記』『日本書紀』『万葉集』に拠るところが大きい。それは漢字の表音用法（いわゆる万葉仮名）を用いた一字一音の資料にみられる語彙に拠っているためである。これらの多くは中央貴族が詠じた韻文資料であり、「日本語」と称しながらも極めて限定的な言語資料をもとに言語体系が構築されている。

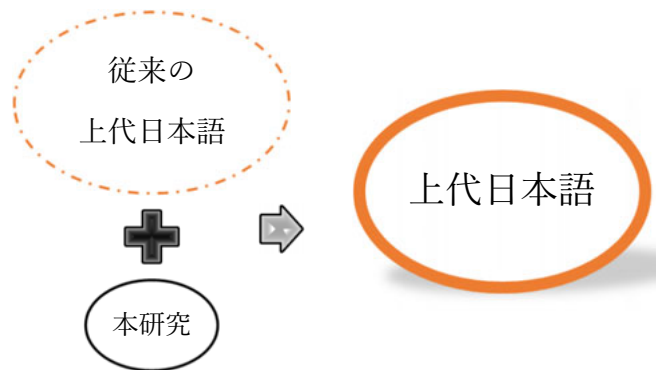
7・8世紀の日本語資料には、それら以外にも正倉院文書や木簡などが存在する。木簡は木に墨書きした日常的な行政文書であり、写本を持たない一次資料である。現在30万点以上あり、国語学的資料として一定の有意性をもつ。木簡による日本語の研究は、近年盛んに行われ、「記紀万葉語」や平安時代の日本語との連続・不連続面について言及されている。

上代日本語研究および上代日本文学研究の指針となる『時代別国語大辞典（上代編）』（三省堂）は、木簡もさることながら、わずかだが固有名詞の語形も立項している。それは、「上代」という時代の資料的制約によるところが大きい。

固有名詞は、地名、神名、人名などにわかれる。地名や神名に比べ、人名は総合的な研究がなされてこなかった。この原因は漢字で記された人名をどのようにヨムのか根拠がないことに由来する。地名が『和名類聚抄』（平安時代成立）において地名のヨミが記載されていることが大きく、また神名は『古事記』『日本書紀』の同一神の比較や、神話の文脈によってある程度、ヨミや語源理解が可能である。それに対し、人名にはヨミの根拠がなく、漢字で書かれているためヨメないことが多い。

人名は『古事記』『日本書紀』『万葉集』にも見られ、先述したように『日本古代人名辞典』（全7冊）に収録される古代の人名は、2万2千にもものぼる。さらに現在も出土する木簡や墨書土器などの文字資料には人名が記されていることが多い。考察するだけの十分な量を有しているといえよう。これまで「固有名詞」だからと考察されていなかったというのが現状である。

「人名」資料を対象とした研究が、「上代日本語」の実像を知るうえで必要であると考えられ、これが本研究の大きな動機である。資料の乏しいなか構築されてきた従来の「上代日本語」研究において、本研究が「上代日本語」を立体的に解明することに繋がるものと思われる。



3. 研究の結果

以下の研究成果を発信することができた。

- ① 「日本語の音韻と書記に関わる諸問題」『万葉をヨム 方法論の今とこれから』笠間書院（2019年5月）
- ② 「『万葉集』にみる文字表現—漢字の「飼い慣らし」と「仮名」との隔たり」『現代思想』第47巻11号（2019年8月）
- ③ 「『古事記』における文字運用—「賣」字における表語性をめぐって—」『古事記年報』62号（2020年3月）

これらは「古代人名」の整理・考察をもとにしたものである。「上代日本語」の文字・表記の分野において一定の研究成果をあげることができた。特に③は7・8世紀において女性名のマーカ儿的役割で用いられる「賣」字について考察したものであり、本研究の大きな成果といえる。

日本人における人名は、その多くが日本語で命名され漢字で表記される。人名の考察は、日本語の漢字運用を中心に研究成果を日本語史研究に寄与でき、また古代人名の国語学的研究の有用性を実証することができた。

また副次的に次国文学における研究成果を発信することができた。

- ④ 「『万葉集』三三六番歌考 —筑紫の宴と志向する「今」をめぐって—」『あいち国文』第13号（2020年9月）

これにより本研究における学際的効果が証明されたものと思われる。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究では、7・8世紀の日本語研究における新しい資料として、「古代人名」を用い研究成果の発信を重ね、日本語における漢字の運用面として考察することができた。

漢字をいかに受容し、日本語の文字として「飼い慣らし」て、運用してきたのか。そして「仮名」へと転用させていったのか。これが私の研究テーマである。『古事記』『万葉集』『日本書紀』といった貴族層の文字運用ではなく、「日常ふだん」においてどのように漢字を運用したのか、これからも継続的に考究していきたい。それには出土文字資料などの考察も重要となり、さらなる歴史学・考古学との学際的研究の必要性を感じている。

さらに中国語の文字である漢字の受容と、自国語への運用は、いわゆる「漢字文化圏」（「漢字文明圏」とも）の共通する課題でもある。東アジア的巨視をもちながら研究する必要があると考えている。

5. 社会に対するメッセージ

新しい年号である「令和」の出典が『万葉集』であったことから、2019年度において『万葉集』が出版業界を中心に脚光をあびることとなった。一方で「『万葉集』とはなんぞや」と概説的なことに留まり、『万葉集』の歌が詠まれた時代の言語がどのようなものなのか、と踏み込んだ内容に至ることはなかった。文学作品も日常役人が記す行政文書も、言語の営みで行われた結果である。資料が記された時代における言語の実態解明なくして、本質的な理解に届くことはない。

日本語研究における文字・表記の研究は近年増えてきている。文字を記すという言語行動は、文学研究・歴史学研究ともに対象とする資料に共通する。言うまでもなく文字が記されていない文献資料はありえない。また記される材料や出土する場などを含めれば考古学とも関わりをもつ。そのため文字・表記研究は日本語研究におけるどの分野よりも学際的研究の親和性が高い。7・8世紀を対象とすることは、もとより学際なくして研究は成り立たない。

様々な知見を駆使し、真理に近づく。これほど面白い分野はない。研究成果における社会への有益性はもちろんだが、研究の面白さを発信すること、研究のイマを理解していただくこと、これが大切だと思う。